

『三ギニー』における風刺の考察
— 皮肉的風刺表現 —

小野 和子

1. はじめに

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941)は、『三ギニー』(Three Guineas)を入水自殺の三年前の1938年に出版したが、戦争を阻止するための兄への手紙の返信という形式になっている。その当時は、多くの女性が女性差別に目覚め女性の人権を主張し始めた時代であった。性差別廃止法が1919年に施行されたが、ウルフはその実態は、名ばかりであると『三ギニー』において次のように批判している。

... we have been admitted to the Civil Service and to the Bar; but our position there is still very precarious and our authority of the slightest. (127)

... 女性も公務員と法廷弁護士の職に就けるようになりましたが、これらの職種での女性の地位はまだおぼつかないものであり、ごくわずかな権限しかありません。(25)

本作品は、長きにわたり女性差別を強いてきた家父長制への批判を反映している。ウルフはペンの力により、家父長制の強固な壁に、聡明な気の利いた風刺的な皮肉表現により、果敢に立ち向かっている。ウルフ独特の皮肉的風刺表現、ユーモアを交え破壊的衝突を回避し反対派を納得させる表現方法、まるで鳥がさえずるように、名曲が演奏されるように優雅に流れ読者を魅了する表現方法の神髄を「なぜ」「何を」「どのように」の観点から先行研究も参考にしながら模索し、考察する¹⁾。

2. 「なぜ」『三ギニー』で風刺表現がなされているのか。

ウルフ独特の皮肉的風刺表現は、歌の節まわしに例えれば‘ウルフ節’と呼称できるかもしれない。『三ギニー』は、貴兄からの〈どうすれば戦争を阻止できるか?〉という手紙に返信するという設定で始まるが、皮肉的風刺表現は、その冒頭部分からささやかに次のように始められている(太字は筆者)。

... a letter perhaps **unique in the history of human correspondence**, since when before has an educated man asked a woman how in her opinion war can be prevented? (117)

貴兄のお手紙は人類の通信史上、おそらく例のないものです。いったい<教育の

ある男性が一介の女性に向かいくどうしたら戦争を阻止できるか、お考えを聞かせてくださいますか？>などと尋ねたことが、これまで一度だってあったでしょうか…(8)

控えめな表現から始まり、太線部分はユーモア的であり、冒頭部から女性の意見を尊重することのない女性差別の風潮を的確に批判している。このように、控えめな表現をしながらもユーモアを交えて的確に女性差別を指摘するウルフ独特の皮肉的風刺表現いわゆる‘ウルフ節’が「なぜ」生まれたのか、その時代背景とウルフの風刺の神髄を考察する。

2.1 時代背景

「なぜ」ウルフは『三ギニー』において風刺表現により女子差別の事実を糾弾せねばならなかったのか、作品の書かれた時代背景よりその動機の調査を試みる。奥本は、ウルフの皮肉的風刺について、Alex Zwerdlingを引用して、ウルフの時代の社会風潮は、女性が怒りを持つことは恥ずべき行為であり怒りを押さえることが美德とされており、それ故に、ウルフのフェミニズムは、家父長制社会による女性差別への怒りとその心をなだめる葛藤から成り立っていると分析している(68-69)。Alex Zwerdlingは次のように述べている（太線は筆者）。

For such critics, Woolf's calculated strategy is a form of self-betrayal, her attempt to sound cool and Olympian seriously misguided. Her neoclassical aesthetic theory is seen as an elaborate superstructure based on the unacknowledged need to repress her own feelings. And her refusal to vent her anger is used to explain certain crucial elements in her life and work—...her **playfulness and persistent use of fantasy** on the other. In the former, anger is turned inward; in the latter, evaded. (70)

上述のように、ウルフのフェミニズムは、家父長制社会の女性差別の抑圧のもとにおいて怒りを抑圧する自らへの背信行為を基本にして構成されていることから、その心情を垣間見ることができるとされる言葉‘**playfulness and persistent use of fantasy**’の類推を試みた。一つには、自己矛盾の葛藤から自らを是正するためには、笑いを誘う風刺的表現を取り入れたのではないかと類推せざるを得ない。また一方では、時代風潮から直接的な衝突を回避し間接的に家父長制の問題点を指摘して、衝突を和らげ事態を改善すべきであるという方向に導こうとしたとも類推できる。例えばウルフは、怒りをなだめる心の流れを『ダロウェイ夫人』において描写している。ダロウェイ夫人は娘の家庭教師であるミス・キルマンを快く思っておらず憎しみの感情を自ら浄化する方法を次のように描写している。

For it was not her one hated but the idea of her, which undoubtedly had gathered

in to itself a great deal that was not Miss Kilman; had become one of those spectres with which one battles in the night; ... Nonsense, nonsense! she cried to herself, pushing through the swing doors of Mulberry's the florists. (12-13)

でもわたしが憎んでいるのはあの女そのものではなく、わたしの心のなかにあるあの女のイメージなのだ。ミス・キルマンでないとくさんのものが寄り集まっているイメージ。それは夢の中で格闘しなければならぬ亡霊となり、… くだらない！ なんてくだらない！ ミセス・ダロウェイは、マルベリー花店のスイングドアを押しながら、心のなかでそう叫んだ。(27-28)

ダロウェイ夫人は彼女自身の憎しみを分析して憎しみと戦うが、美しい花々や周囲の人々の好意に自分自身を癒して憎しみを浄化していく様が次のように描写されている。

..., as if this beauty, this scent, this clour, and Miss Pym liking her, trusting her, were a wave which she let flow over her and surmount that hatred, that monster, surmount it all; and it lifted her up and up ... (14)

この花の美しさ、このかぐわしさ、この色彩、好意と信頼を寄せてくれるミス・ピムの存在が、あたかも一つの波となって彼女を覆い、憎しみというあの怪物を、もろもろ思いと一緒に、押し流してくれたかのようにだった。そしてその波は彼女を上へ上へと運びあげていった。(29)

上記の怒りをなだめる心理描写は、当時の家父長制の社会風潮におけるウルフの心情を女主人公に投影したものと類推でき、怒りをなだめる過程で、ウルフの皮肉的風刺表現は、生み出されたと類推できる。

2.2 ウルフの皮肉的風刺の真髄—ドレッドノート号いたずら事件

女子差別撤廃を旗印に、女子差別の歴史的事実を段階別に分けて、詳細に克明に紹介することにより、反対派との決定的な衝突を回避し、論理的に正当に相手を納得できる皮肉的風刺である‘ウルフ節’の根底に流れるウルフの精神、すなわちユーモアと愛に溢れるその神髄を、彼女の行動から模索する。市川は、作家デビュー前にウルフが「ドレッドノート号いたずら事件」に加わったことを紹介している。市川によれば、ドレッドノート号いたずら事件は1910年2月7日に起き、首謀者はホレス・コールというケンブリッジ出身の男で、さまざまないたずらを仕掛けていわばトリックスターとして名を馳せた人物であるが、彼のケンブリッジ仲間やウルフが所属していたブルームズベリー・グループのメンバーにウルフも加わって、アビシニア（現エチオピア）の王子の一行とその通訳に扮し、ウェイマス湾に停泊していた当時最大の戦艦、ドレッドノート号に乗り込んで偽の視察を行ったという事件である(1)。さらに市川は、「この事件は、単に

ウルフの異色の過去あるいは若気の至りとして受け流されてきたかもしれない。だが、いくつかの意味でその後のウルフの著作活動に深くかかわる要素を潜在させているとみることでもできそうだ。」(1)と述べている。また、この事件の表題を“The Dreadnought Hoax: Young Virginia Woolf and Her Bloomsbury Posse Prank the Royal Navy in Drag and a Turban.”として、Maria Popovaは次のように述べている（太線は筆者）。

On February 7, 1910, six friends pulled off one of the greatest pranks in history — on the Royal Navy, no less. Among them was Virginia Woolf — at the time still Virginia Stephen, an unpublished twenty-eight-year-old aspiring author — wearing drag and a turban. It’s a remarkable story about privacy and security, **about poking fun at society’s ideas about bravery and authority, ...**

この事件は、全く前代未聞であり、上記の太線のように権力を誇示するものに対しての「からかい」であり、後の作家活動において発揮される皮肉の風刺精神の神髄となるものと類推できる。また市川は、「ウルフは、「ある会（“A Society”）」という短編（1921年）でこの事件を取り挙げている。」と紹介している。その短編の内容は、数人の若い女性たちが「協会」を作り、男性社会の各分野に入り込みそれぞれの経験をお話する会との設定であり家父長制社会を揶揄するかのようユーモアに満ちたお話しが記述されているが、ウルフは一人の女性にこのいたずら事件を模して語らせ、大英帝国海軍の名誉回復のために、「... 驚いたことに背中を六回、軽く叩かれた」(10) “... to her amazement, six light taps upon the behind.”(120) とユーモラスに描写している。また、他の女性は、父親の遺言により、ロンドン図書館の所蔵の書籍を全部読むことが遺産を受け継ぐ条件となっているが(5)、その女性いわく、「... 男たちがこんな駄作ばかり書いているとしたら、...」(8) “... if men write such rubbish as this, ...”(119)と語らせている。ウルフの最初の頃の作品であり、ユーモアセンスも揶揄の勢いに溢れており、まるで男装をして口髭をはやしてドレッドノート号に乗り込んだ若きウルフを彷彿させるかのようであり、前述の‘playfulness’にあふれている。しかし、エトセトラブックスによれば、「数人の若い女性たちが「協会」を結成して、男性社会に潜り込んで、5年後に報告し合うことになり……という、血湧き肉躍るフェミニスト冒険譚であるが、本作を男性評論家に酷評されたウルフは、このような直接的な手法でフェミニズム小説を書くことはありませんでした」と記している。ウルフは、この経験から家父長制社会の因習の中でフェミニズムを遂行させるために無駄な争いを起こさない、いわば戦略として‘playfulness’に‘persistent’を加えて独特の皮肉の風刺表現を生み出したのではと推察できる。

また、梅田は、ウルフとラドクリフ・ホール(Radclyffe Hall)は、同年に20世紀初頭のイギリスにおいて批判されていた同性愛を描き、ホールは出版禁止になったにも関わらずウルフは何の処分も受けなかったことに注目しているが、ウルフは巧みにファンタジー小説『オーランド』(*Orlando*)をフィクションの様相を呈することで検閲を逃れたと

述べている(61)。時代風潮による無益な衝突を避け、主張を遂行する「戦略」は、いわゆる‘ウルフ節’の神髄であり、家父長制社会から生み出される偏見や権力を、的確に批判している。

2.3 ウルフの皮肉的風刺の真髄—夫への遺書と戦争の写真

ウルフの甥であるQuentin Bellにより、入水自殺の前に夫に残した遺書が紹介されている。また、手塚は、ウルフは「自分の介護が夫の人生と仕事を台無しにしているのではないかという罪の意識を明らかにしている。」(191)と述べている。手紙には夫への永遠の愛が溢れており、優しくたおやかで慈愛深い人柄が表されている。

Dearest,

I feel certain I am going mad again. I feel we can't go through another of those terrible times. And I shan't recover this time. I begin to hear voices and I can't concentrate. So I am doing what seems the best thing to do.... I don't think two people could have been happier till this terrible disease came. I can't fight any longer. I know that I am spoiling your life, that without me you could work.... What I want to say is I owe all the happiness of my life to you. You have been entirely patient with me and incredibly good... I can't go on spoiling your life any longer. I don't think two people could have been happier than we have been. V. (226)

この遺書は、生涯つきまとった精神の病に翻弄されたウルフが常に彼女を支えてくれた夫への愛情溢れる感謝の気持ちを持ち続けていたことを証明していると同時に、精神の闇を抱えるウルフの内面は軟弱であり、夫に精神の憩いを求めすがつていたことが表れている。夫レナードがウルフの精神の弱さを補い夫の支えがあったからこそ、ウルフは果敢にフェニズムを掲げて文筆活動を成しえることができたと思われる。これが彼女の人の本質そのものであり、精神の病に苦しみ支えを必要とする弱さと同時に支えてくれる人に対する愛情深さを表していると思われる。

また、ウルフは戦争の惨状を表した写真、男女の判別のできない遺体や爆撃を受けた倒壊家屋を取り上げてその残酷さに心を痛めている。「…それらの写真を「おぞましく厭わしい」と形容します。」(23) “...call them ‘horror and disgust’.” (125)とあり、人として人を尊ぶ心に溢れていると思われる。

『三ギニー』における些細な例では、戦争に対する教会の相反する助言を指摘している箇所である。「状況次第では戦闘も正しい。いかなる状況でも戦闘は正しくない。これには混乱し、困惑し、途方に暮れてしまいますが、…」(21)“So the church itself gives us divided counsel— in some circumstances it is right to fight; in no circumstances it is right to fight. It is distressing, baffling, confusing, ...”(124)と柔らかに戦争がいかに無意味なことであるかということに教会という権力に対して、‘playfulness’ と

‘persistent’に、穏やかな優しさを加えて衝突を避ける表現がなされている。

ゆえに、ウルフの人としての愛情は、夫だけでなく周囲の人々にもおのずと注がれており、独特の皮肉的風刺は、愛情に溢れる思いやりであり文学における皮肉的風刺は、優しさに溢れた魂の深遠なる深みで読者をなだめるように、ユーモアと慈愛と優しさに溢れている。言い換えれば、独特の皮肉的風刺を優しさとユーモアセンスで包み込み、反対派をも納得させる‘ウルフ節’となっているのではないかと類推できる。

3. 「何を」「どのように」風刺表現がなされているのか。

ウルフは「何を」として、家父長制の典型である大学と教会に焦点を当て、歴史的事実を調査し、問題点を追及している。「どのように」においては、主張はいくつかの段階を踏んで展開されており、最初の導入の柔らかな控えめな表現から、次の段階では皮肉的風刺が展開され、最後に自ずと内部から家父長制の問題点を崩壊させ反対派をも納得させる方向に導き無益な衝突を避けている。言わば巧みな戦術とも言える施策が‘ウルフ節’により展開されているのである。

まとめると、大学と教会による女子教育への差別的取扱いに対して、ウルフはユーモアを交えた風刺的な皮肉で的確に女子差別の事実を強く指摘している。次に職業的な女性差別について冷静に詳細に分析し性差別の根本は形のない「空気」の様なものであるという究極の風刺で穏やかに論理的に分析している。

3.1 大学の儀式における男性の服装

ウルフは大学儀式における男性の服装に焦点を当て、家父長制を根源にする大学の権威主義を独特の皮肉的表現を用いて的確に分析している(太線は筆者)。

If you will excuse the humble illustration, your dress fulfils the same function as the tickets in a grocer's-shop. But, here, instead of saying ‘This is margarine; this pure butter; this is the finest butter in the market,’ it says, ‘This man is a clever man—he is Master of Arts; this man is a very clever man—he is Doctor of Letters; this man is a most clever man—he is a Member of the Order of Merit.’ It is this function—the **advertisement function**—of your dress that seems to us most singular. (137)

慎ましいたとえを許していただければ、あなたがたの衣装には**食料品店の値札**と同じ機能があります。ただしこの場合「これはマーガリン-これは純正バター-これは本店一番の高品質バター」という表示の代わりに、「こちらは文学修士にしてそれなりに優秀な男性-こちらは文学博士にしてもっと優秀な男性-こちらはメリット勲章の受勲者にしてとびきり優秀な男性」という表示になるのですが。あなたがたの衣装の持つこの機能-**宣伝機能**-は、わたしたちにははなはだ異様なものと映ります。(40)

まず、最初の太線のように、控えめな表現で導入している。次の太線では、それぞれの服装は食料品店の値札と同じ機能であるとユーモアを交えて揶揄している。最後の太線では、大学における家父長制の問題点が分析展開され、悪癖を的確に非難する。この‘ウルフ節’次のように展開していく(太線は筆者)。

And still the tradition, or belief, lingers among us that to express worth of any kind, whether intellectual or moral, by wearing pieces of metal, or ribbon, coloured hoods or gowns, is **a barbarity which deserves the ridicule which we bestow upon the rites of savages.** (137)

金属片、リボン、色のついたフードやガウンを身につけ知的価値ないし道徳的価値を示すというのは野蛮なこと、未開人の儀礼に対するのと同じ嘲笑に値することという思いは、伝統ないし信念としてわたしたちに染付いています。(41)

最後の太線部分では、家父長制を象徴している大学の権威主義の式典の衣装を価値のないものとして厳しく批判しており、‘ウルフ節’がまさに気炎をあげ、男性中心の家父長制社会を内部から否定し崩壊させるように導いている。

3.2 教会の女子教育差別に対する歴史

ウルフは、教育分野における教会の家父長的施策に焦点を当て、女子教育への差別を強く批判している。まずは二人の有名な女性の教育に関する歴史的無念の事実から導入されている(太線は筆者)。

To prove this let us examine one life only—the life of **Mary Astell.**²⁾ Little is known about her, but enough to show that almost 250 years ago this obstinate and perhaps irreligious desire was alive in her; she actually proposed to found a college for women. What is almost as remarkable, **the Princess Ann** was ready to give her £ 10,000—a very considerable sum then, and, indeed, now, for any woman to have at her disposal— towards the expenses. And then...**the Church intervened. Bishop Burnet was of opinion that to educate the sisters of educated men would be to encourage the wrong branch,** ... the Roman Catholic branch, of the Christian faith. The money went elsewhere; the college was never founded. (146-147)

その証拠に一冊だけ、**メアリ・アステル**²⁾の伝記を調べましょう。アステルのことはあまり知られていませんが、およそ250年前、この根強い、おそらく従順とは言えない願望をアステルが抱いたことがわかっています。実際、女性のための大学を作りましょうと提案したのです。そして同じくらい注目すべきことに、

アン王女は一万ポンドを出資しようとした—女性が好きに使える金額としては、当時でも現在でもじつに高額です。すると...教会が待ったをかけました。バーネット主教の見解では、<教育のある男性>の姉妹に教育を受けさせると、キリスト教会の中でも邪悪な部類、…ローマ・カトリック教会を助長させることになりかねない—というのでした。一万ポンドには別の用途が与えられ、女性のための大学は開設されませんでした。(51-52)

歴史的事実として、最初の太線ではメアリ・アステルが紹介され、次の太線では、一万ポンド出資したアン王女の貢献が述べられている。しかし、最後の下線では、家父長制の典型ともいべき教会の女子教育への否定と阻止が紹介されている。この教会の女子教育差別の歴史は次の段階へと展開され、ウルフは、別の用途に消えたアン王女の一萬ポンド出資金について、ここでも冗談っぽく揶揄するかのよう描写する(太線は筆者)。

A beggarly £ 10,000 — the very sum that the bishop **intercepted** about two centuries previously. That £ 10,000 surely was **disgorged** by the Church that had **swallowed** it? But churches do not easily disgorge what they have swallowed. (149)

ほんの一万ポンド—約二世紀前に主教が横領したのと同額です。もちろん、教会は貰った一万ポンドを返してくれるのではないのでしょうか？ でも教会というところはもらったものを簡単には返しません。(55-56)

ウルフは、教会によるアン王女の一萬ポンドの使途についての教会の女子差別を非難している。太線の“**intercepted**” “**disgorged**” “**swallowed**” は金銭横領に属する単語であり、豊かな語彙を用いてからかい、家父長制権力の象徴に対して冗談を交えて独特の‘ウルフ節’でまるで組織全体の面目を粉々にするかのようであり、失笑を禁じ得ない。

3.3 大学の女子教育差別に対する歴史

ウルフは、女子教育差別の歴史の次の展開として、大学の女子学生への学位授与の歴史の顛末を独特の皮肉的風刺を駆使して描写している。女子学生が女子差別教育を乗り越えて卒業試験に何とかたどり着いた時の大学の姿勢は次のように表現されている。

..., whether the girls who had passed examinations might advertise the fact as those gentlemen themselves did by putting letters after their names. (150)

合格した女子学生にはどんな肩書がふさわしいでしょうか、みなさんと同様に自分の名前のあとに肩書をつけ、試験に合格したという事実を知らしめてもよいでしょうか。(57)

この控えめな申し出は、断固たる反対にあい、圧倒的多数で否決された。そして、投票日の様子が、次の段階として続けて描写されている。

...On the day of the voting there was a great influx of nonresidents and the proposal was thrown out by the crushing majority of 1707 to 661. ...The behaviour of some of the undergraduates ... was exceptionally deplorable and disgraceful. (150)

投票日には学外生もなだれこんできて、1707対661という圧倒的多数で提案は否決された…度外れに不埒で不名誉なふるまいに及ぶ男子学生もいた。(58)

ウルフは、更に女子教育への歴史的な始末を分析し歴史的事実の描写を続ける。

... they will use not force but much subtler methods than force when they are asked to share them? (151)

持っているものを分けてほしいと頼まれようものなら、腕力よりももっと狡猾な方法で妨害するのではないのでしょうか？ (58-59)

結果的に名前のあとに文学士の肩書をつける権利は認められたが、「頼みごとをする女性に求められる慎ましさを忘れずに…」(59)“with the humility expected of our sex” (151)とあり、計り知れない粘り強さだったと記されている。このように、ウルフは家父長制の典型である教会と大学における女子教育差別の歴史を段階別に分けて説明分析し、当時の女性の置かれている立場をよくわきまえ、家父長制による女子差別をなくし、女性の人権を促進することに果敢に挑戦している。冗談を交えての独特の皮肉の風刺による‘ウルフ節’により、決裂するのではなく、女子差別への事実を論理的に正当に主張し反対派を納得させる説得力を保持することに努力している。

3.4 職業生活の重要な要素— 一種の「空気」“atmosphere”

ウルフは当時の女性に求められていた社会理念を保守的な『デイリー・テレグラフ』紙から次のように引用している。

...a considerable amount of the distress which is prevalent in this section of the community [the clerical] could be relieved by the policy of employing men instead of women, wherever possible. There are to-day in Government offices, ... thousands of women doing work which men could do. At the same time there are thousands of qualified men, young and middle-aged, who cannot get a job of any sort. There is a large demand for woman labour in the domestic arts, and in the process of re-grading a large number of women who have

drifted into clerical service would become available for domestic service. (173)

…事務職に広がっているかなりの不満感は、女ではなく男をできるだけ雇用するという方針で緩和されるだろう。官公庁…などの職場で、何千もの女性が男にもできる仕事をしている。その一方で何千人もの男たち若年層から中年層までの資格のある男たちがまったく職を得られずにいる。家事において女性労働には、多大な需要がある。資格要件を変えれば、事務職に流入した数多くの女性を家事サービスに充てることができる。(1936年)(97)

ウルフは、当時の保守的な新聞記事を引用することにより、女性に職業的自立ではなく家事労働のみを要求する社会風潮を批判している。またウルフは、<教育のある男性の娘たち>の賃金は、「信じがたいほどの少額」(86) “incredibly minute”(166)であり、職業を調査すると「政府と官公庁」(87) “Government and Public Offices”(167)の分野では、「給与が足りないというより、<教育のある男性の娘>の数がそもそも足りていないのでした。」(90) “... it is not the salaries that are lacking; it is the daughter of educated men.” (169) と当時の女性の職業進出の実態を明らかにしている。

また奥本によると、性差別が起こっているのは“atmosphere”が原因であるとウルフは確信していた(72)。ウルフがこの“atmosphere”を描写する際には、まず「「ミス」という呼称の持つ芳香/臭気」という比喩を持ち出す。「「ミス」という呼称は個人の家の中でいくら芳香を漂わせているにしても、官公庁ではある種の臭気を放ち…」(98) “... the word ‘Miss’, however delicious its scent in private house, has a certain odour attached to it in Whitehall...(174)。さらに、ウルフは次の段階へと次々に進めていく。「このように臭気— 一種の「空気」と呼びましようか—は職業生活においてきわめて大切な要素です。」(99) “Odour then – or shall we call it ‘atmosphere’ ? – is a very important element in professional life; ...” (174)、<空気>とおよそ関係がなさそうと考えられるもの、給料のような確かな実体にも変化をもたらします。」(99) “... it affects solid bodies, like salaries, which might have been thought impervious to atmosphere.” (175)と分析している。「空気」“atmosphere”と形容することにより、ウルフは家父長制の社会風潮の意識の根源を物理的に実体のない、価値のないこだわりの意識であると穏やかにかつ論理的に否定しているのである。

4. まとめ

以上述べてきたように、ウルフは、女性差別廃止、女性の人権獲得を目指して家父長制の典型である大学や教会の在り方を段階別に分けて論理的に的確に批判して否定している。最初の導入では、当時の状況で女性に求められた控えめな慎ましきで表現されているが、次の段階では、優しさとユーモアセンスで緩和されている皮肉的風刺を展開させ、最終的には、家父長制の女性差別への問題点を的確に批判し、根源は形のない「空気」“atmosphere”の様なものであると、家父長制そのものが内部から自ずと崩壊せざる

をえないように独特の皮肉的風刺表現‘ウルフ節’により自らの主張展開を導いている。ウルフは、衝突を回避し名曲の節まわしのように反対派を批判しつつ、自分自身をも納得させ和解させ、建設的に次世代の女性が人権を獲得する上での礎を築き上げることに貢献している。女子差別は、現在もなお取り組まなければならない課題であり、私たちは、ウルフの「偉業」に感謝しながら、果敢に女子差別に立ち向かったその精神と目標を受け継ぐべきである。

注

- 1) 風刺研究では、福本の著書『『ダンシアッド』における風刺の研究』における「なぜ」「何を」「どのように」の三つの観点からの分析研究(19,251)を、参考にした。
- 2) メアリ・アステル(1668-1731)は裕福な石炭商人の家に生まれ、家庭で叔父からプラトンを学ぶ。両親の死後、貴族女性やカンタベリー大主教の援助を受けながら著作を発表。『淑女たちへの真面目な提案』(1694)で、女子教育の必要性について論じ、1709年には女子のための慈善学校を設立した。(片山 訳より, 337)

引用文献

- Bell, Quentin. (1972). *Virginia Woolf: A Biography*. Harcourt Brace.
- Popova, Maria. (2014). *The Marginalian*.
<https://www.themarginalian.org/2014/02/07/dreadnought-hoax-virginia-woolf/>
- Woolf, Virginia. (1986[1921]). “A Society” in *The complete shorter fiction of Virginia Woolf*. Hogarth Press.
- Woolf, Virginia. (2000[1925]). *Mrs. Dalloway*. Penguin.
- Woolf, Virginia. (2019[1938]). *A Room of One's Own and Three Guineas*. Penguin.
- Zwerdling, Alex. (1983). “Anger and Conciliation in Woolf’s Feminism” *Representations*, 3, 68–89, University of California Press.
- 市川緑 (2014). 「『不文律』を書きかえるためにヴァージニア・ウルフとイデオロギー批判」大阪府立大学大学院文学研究科。
<https://dlisv03.media.osakacu.ac.jp/contents/osakacu/kiyo/111TDB2751.pdf>
- 梅田杏奈 (2022). 「男女の狭間を生きる者—ラドクリフ・ホールの『孤独の井戸』に見られる脱女性化とヴァージニア・ウルフの『オーランドー』に見られるジェンダーの多様性」ヴァージニア・ウルフ研究, 39, 49-66.ヴァージニア・ウルフ協会.
- ウルフ、ヴァージニア(2017).『三ギニー —戦争を阻止するために—』片山亜紀 訳 平凡社.
- ウルフ、ヴァージニア(2018).『ダロウェイ夫人』丹治愛 訳, 集英社.
- ウルフ、ヴァージニア(2019).『ある協会』片山亜紀 訳, エトセトラブックス.
エトセトラブックスの本「ある協会」.
<https://etcbooks.co.jp/book/arukyokai/>
- 奥本京子(2002).「ヴァージニア・ウルフ著『三ギニー』に見る平和主義と「暴力の文

化への考察 一男達の“fear”と女達の“fear”一」大阪女学院短期大学紀要, 32, 65-75.
手塚裕子(2009).「老いてゆくモダニズム女性作家たちーキャサリン・マンスフィールド
とヴァージニア・ウルフー」川村学園女子大学研究紀要, 20,1,179-193.
福本幸之(2020).『『ダンシアッド』における風刺の研究』晃洋書房.